

## 「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

今回は流れ川用のウキがテーマになる。流れがある場所でのヘラブナ釣りは独特で、止水域の管理釣り場や釣り堀と違った別の世界がある。

川の釣りでは流れに応じたウキを使うことが必要で、それぞれに適した形状、素材などを紹介することで、より釣りやすくするための目安となればと思う。

また、流れ川用として有効なクジャクの羽根3枚合せと4枚合わせ、バルサ材のウキについても紹介しよう。

### 第11章 流れ川に対応するウキ

#### はじめに

流れ川用のウキは実に多彩であり、新しいトップの形状の開発等、まだまだ発展途上にあると言っても過言でない。

流れに対応する方法は仕掛けやセッティングを含めたトータルバランスであり、ウキはその1部でしか過ぎない。

その釣り場のクセを反映した独特の仕掛けやウキがあり、セッティング合わせる事がとても重要となっている。

#### 川釣り用ウキの形状

ヘラブナ釣り具専門店に行くと、川釣り用と思われるウキの形状はイラスト1にあるように多彩だが、大まかに区分すると次の5種類となる。

##### ①本流用の巨大ウキ

全長60cm以上ある巨大ウキ。その浮力と長いトップで本流の強烈な流れによるシモリに耐えるようにしている。細長い形状のため、斜めになりやすい。

##### ②カンザシタイプ (パイプトップ)

流れ川用のウキの標準型。ボディー形状を球に近い型にして、水の抵抗を軽減するようにしている。また、トップはパイプのために軽く、強い流れにもたえることができる

##### ③カンザシタイプ (グラスムクトップ)

②のウキのトップをグラスムクにしたもの。ムクにして径を細くすることで水の抵抗を軽減できる。また、グラスムクトップは剛性が高いことから、ウキが立ち上がる時にトップの水切れがよく、ウキが「シャッキ」と立ち上

がる。

オモリベたで流れが強い時、トップがパイプトップよりも長いことから、かなりのしもりが生じて、アタリを取ることができる。

しかしながら、グラスムクトップは比重が重く、浮力がボディーに依存することから、復元力が弱く、パイプトップよりもシモリやすい反面もある。また、トップが細いことで視認性は悪くなる。

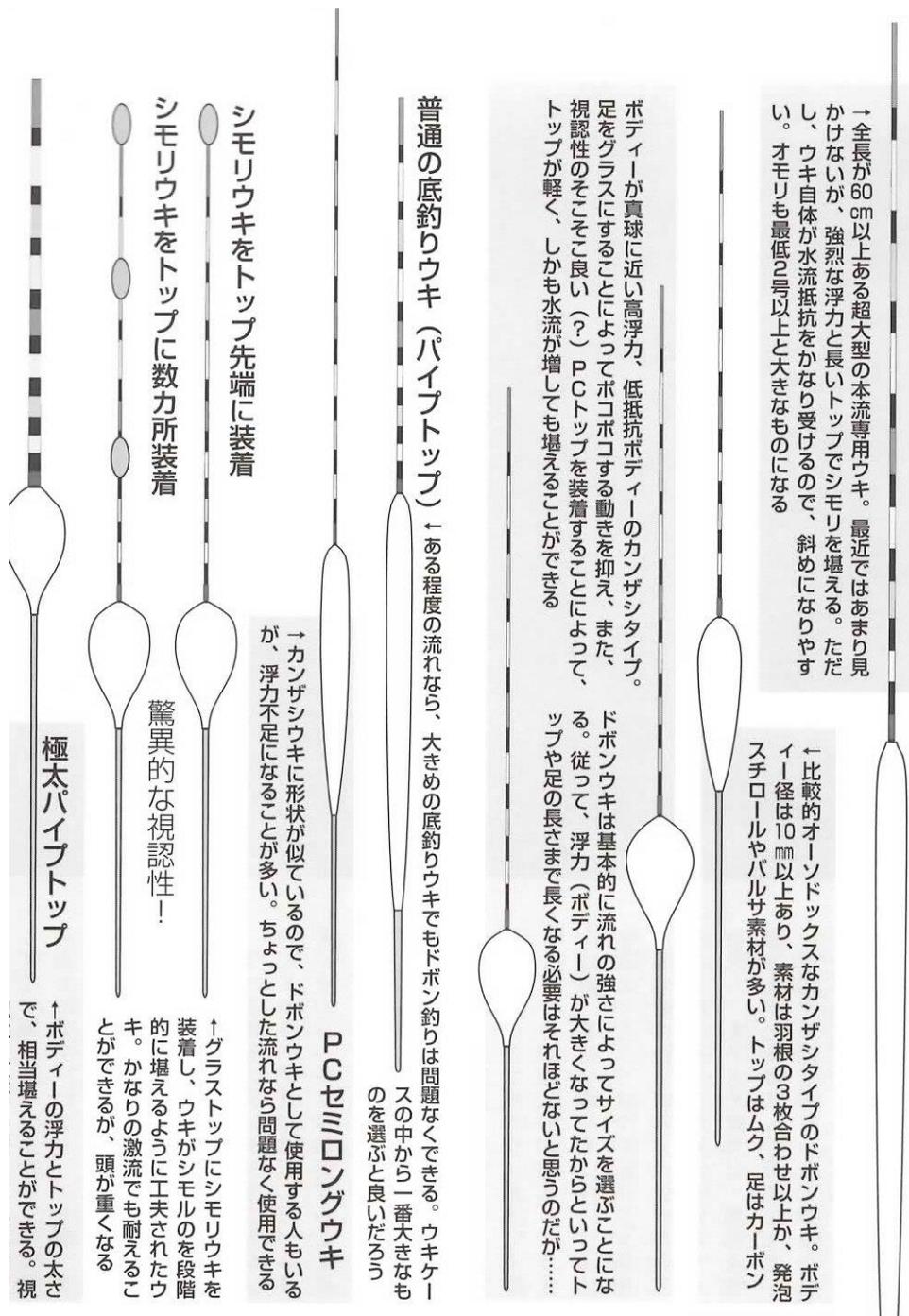
#### ④かんざしタイプ（シモリウキをトップに付けたもの）

③のウキのトップにシモリウキを付け、視認性を向上させたもの。シモリウキをトップ先端のみに付ける場合と、数ヶ所付ける場合がある。また、シモリウキをトップに付けることで、ムクトップのシモリやすい性質を改善することができる。

#### ⑤カンザシタイプ（極太パイプトップ）

②のウキのトップを極太パイプに変更したもの。極太パイプトップによりシモリが軽減され、視認性は良い。

いずれにしても、釣り場の流れの強弱により、トップの種類を使い分けることが重要になる。



筆者が製作する「尽心作」では、川釣り用のウキとして②③④にあたる「Type-R」「Type-R2」「Type-R2改」の3種類をラインアップしている。

ただ、流れ川対応のウキはまだまだ発展途上にあるため、仕様が固まり切っていないのが現状だ。

●Type-Rの仕様

ボディ：羽根3枚合わせ（バルサ材のボディもあり）

足：カーボンで元径1・0mm→0・9mm→ゴム管差し込み1・0mm

トップ：PCパイプ（ポリカーボネイトパイプ）の細で、元径1・4mm。目盛りは7～11

羽根径：5mm

●Type-R2の仕様

ボディ：羽根3枚合わせ（バルサ材のボディもあり）

足：カーボンで元径1・0mm→0・9mm→ゴム管差し込み1・0mm  
トップ：ガラスソリッドで元径1・0mm。目盛りは9～13（PCムクもあり）

羽根径：5mm

●Type-R2改の仕様

ボディ：羽根3枚合わせ（バルサ材のボディもあり）

足：カーボンで元径1・0mm→0・9mm→ゴム管差し込み1・0mm

トップ：ガラスソリッドで元径1・0mm。目盛りは9～13（PCムクもあり）。

トップ3カ所にシモリ玉を付けている

羽根径：5mm

## 写真1



上「Type-R」、下「Type-D」、上「Type-R」はクジャクの羽根3枚合わせで、ポリカーボ製のパイプトップを装着している。下「Type-D」と比較すると、約1・4倍の浮力がある。

## 写真2



「Type-R2」もクジャクの羽根3枚合わせだが、トップはグラスムク  
トップを装着している。

## 写真3



「Type-R 2改」もクジャクの羽根3枚合わせで、グラスムクトップで3か所にシモリ玉を装着している。

### 流れ川の釣りにおけるカンザシタイプの有用性

なぜ、流れ川用のウキにカンザシタイプ（ボディー形状を球に近い型にしたもの）が多いのか、次の理由が考えられる。

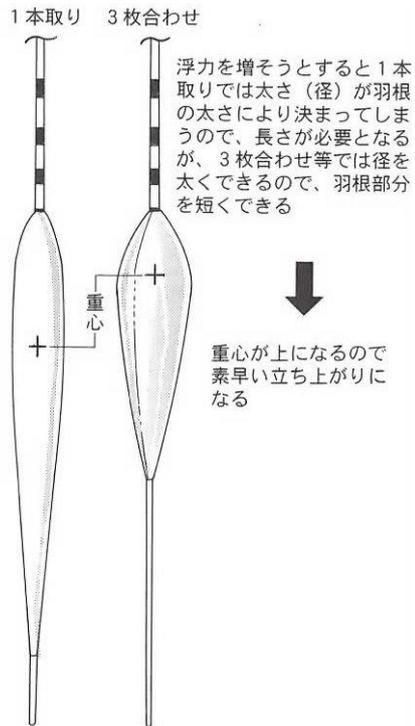
①イラスト2に見られるように、ボディーを3枚合わせにしてカンザシタイプにすることで、ウキの重心がウキの肩側に移動し、その結果、オモリの沈下が高いときにウキが立ち上がり始める。特に流れ川における宙釣りでは、ウキの立ち上がり始めるタイミングが遅いと、立ち上がるまでにウキが流されてしまい、非常に釣りにくい状況となる。逆に、ウキの立ち上がり始めるタイミングが早いと少しでも長くアタリが取れる範囲が広がる。

②イラスト3にあるように、同じ浮力のウキでも、投影面積（平衡な光で照らした場合に出来る影の面積）が大きなものほど水流に対する抵抗が大きくなる。ボディーの形状はヘラウキ特有の細長いものよりも、横の投影面積が小さい真球形に近いものが理想である。

カンザシタイプのウキの場合、水の流れを受けたときに肩側と足側では流

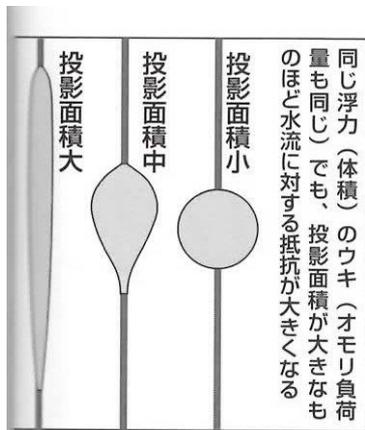
速に違いが発生し、そこに水圧差が生じることにより、ウキが水圧の低い方（ウキ肩側）に移動しようとする力が発生すると考えられる。この力（揚力）がウキ本来の浮力に加算されることにより、ヘラウキ特有の細長い形状よりも、かんざしタイプは流れにくいと感じている。

### イラスト2 重心の位置の違い



### イラスト3 投影面積の違い

投影面積（平衡な光で照らした場合に出来る影の面積）が大きいほど、水の抵抗が強くなり、流れ易くなる。



## ボディー素材の多様性

流れ川の釣りにおけるヘラウキのボディー形状は、投影面積が小さい真球形に近いものが理想である。この真球形に近いボディーを製作しようとした場合、従来のクジャクの羽根やカヤよりも、バルサ材や発泡スチロールのほうが加工しやすい。

また、強烈な流れに耐えるには、浮力はより強いほうが望ましい。このあたりが、流れ川用ウキのボディー素材の多様性を生んでいる。

## シモリトップについて

トップは細いほど水の抵抗を受けにくいだが、視認性は悪くなる。この問題を解決するために、写真4にあるようなシモリ玉をトップに取り付けて視認性を高める。

もともとは海釣り用のものであるが、発砲スチロール製で加工が容易なことから、ヘラブナ釣人の中でも広まったと思われる。

## 写真4



このシモリ玉をトップに付けることで、トップの浮力が増し、視認性が向上する。

#### クジャクの羽根の多枚合せについて

最近感じていることは、クジャクの羽根の3枚合わせや4枚合わせといった、多枚合せのウキを見かけなくなったことである。

関西には今でも高名なウキ師の方々がクジャクの羽根の多枚合せのウキを製作されているが、関東ではあまり見かけなくなっている。

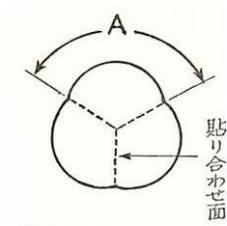
理由は定かではないが、クジャクの羽根の多枚合せのウキも奥が深く、6・5mm程度が太さの限界であるクジャクの羽根から、できるだけ浮力のあるウキをつくるために考案された技法である。

イラスト4にある通り、羽根を3枚合わせる場合は120度、4枚合わせの場合は90度にカットして張り合わせていく。

#### イラスト4 3枚合わせの形状

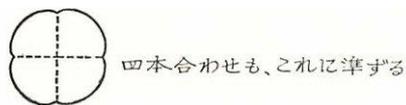
これは孔雀の羽根3枚合わせウキのボディーの重心付近の断面図。Aは孔雀の羽根1本から採取する部分を表示している。1本取りや2枚合わせよりも、

3枚合わせることで、体積が増していることがわかる。



#### イラスト5 4枚合わせの形状

これは孔雀の羽根4枚合わせウキのボディーの重心付近の断面図。Aは孔雀の羽根1本から採取する部分を表示している。4枚合わせることで、3枚合わせよりもさらに体積が増していることがわかる。



尽心作の場合、羽根上部の柔らかい部分を利用し、5mm径に径を真鍮管で修正して製作している。

5mm径を3枚合わせにすると8mm径のウキに仕上がるようにしている。

柔らかい羽根上部を使用していることから加工しやすく、羽根の厚みを100%活用し、中綿を山形に削り残して、体積を1本取りや2枚合わせよりも増していることから、ボディーの長さが60mmの3枚合わせでは、約1.4gのおもり負荷量がある。

Type-Rのボディー60mmとType-D（写真1を差し替え）のボディー60mmを比較すると、足の長さやトップの長さの違いがあり厳密に比較できないが、3枚合わせで約1.4倍の浮力がある。

#### バルサウキについて

バルサは、南米の熱帯地域からメキシコ南部が原産で、成長が早く、樹高は30mに達する常緑樹である。

幹は木目が粗く、非常に軽く軟らかい材木である。バルサの密度は一般的な木材の約3分の1である。このため、バルサは模型やウキ、救命胴衣などに使用されている。

ヘラウキの素材としては、かなり以前から使用されており、工作が容易で、

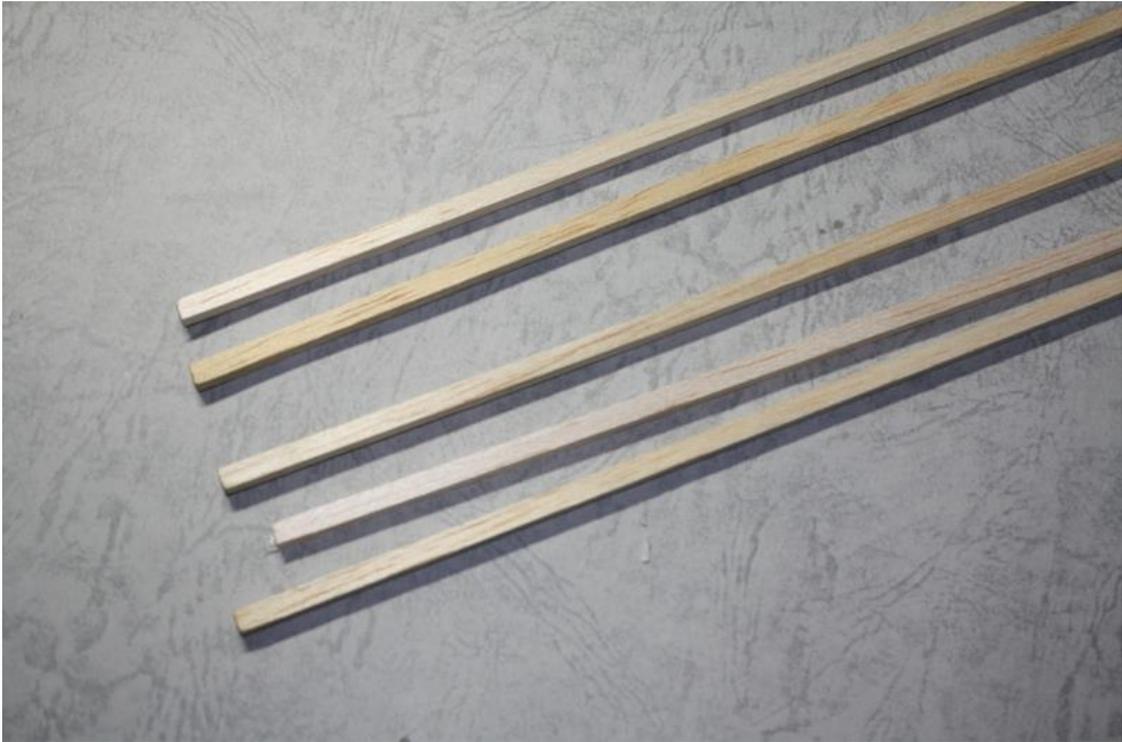
扱いやすく、流れ川用のように浮力が求められる場合には格好の素材である。

しかしながら、材質がやわらかいため折れやすく、吸水性が大きいことから、塗装には工夫が必要である。

私は中学生の頃、クジャクの羽根では形にならなかったのが、仕方なくバルサ材で製作していた。

今ではとても良い思い出である。

## 写真5



このバルサ材は、ウキ用に縦長にカットしたもの。バルサの良い所は加工しやすく、比重はカヤ、羽根よりも軽く、浮力のあるウキを製作できる。

## 写真6



バルサ材で作成した、タナ取り専用ウキ。このウキのメリットは、バルサ材を使用することで浮力が大きく、重いタナ取りゴムを使用して、従来よりもより垂直にタナを測定することができる。